
トライアングルの音色

雪那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングルの音色

【Nコード】

N8392B

【作者名】

雪那

【あらすじ】

ある日の部活帰り、悠は急な雨に降られてしまう。そのところに現れたのが服屋の息子で、クラスメイトの考に遭遇。考の母親は悠を家に迎え入れた。そこから、悠を巻き込んだ男同士の戦いらしきものが始まる。考は悠が好きだ。しかし悠の幼馴染、芯は悠のことを彼女という。もちろん悠はそんな話を聞いた事はなかった。考も知らない。芯は悠に迫るが、考は中々迫る事が出来なかった。

「ハックションー！！」

（うう…寒い…）

豪快なクシヤミをあげたのはあたしです。

久米悠です。

今部活の帰りなんだけど、天気予報に外れた大雨に降られちゃって
びしゃぬれ…。

目茶苦茶寒い（泣）

「ぶっ！」

「はっ？」

「すげーくしゃみ！」

「ヒドッ！傘忘れちゃったんだよ！」

ふと私の横に現れたのはクラスメイトの川崎考。
近所で親が洋服屋をやってるんだ。

「あら。考お友達？」

「クラスメイトのハルカだよ。話したろ？前に」

「うん。ってビショビショじゃない！？大丈夫？」

「あっはい。」

「大丈夫大丈夫こいつ馬鹿だから風邪引かねーし。」

「ちよっと！」

「考変な事言うんじゃない！ハルカchan家に寄りな？タオル貸
すわ。風邪引いちゃう」

ニコニコと笑うおばさんを見て考はどこで捻くれになったんだ？と
思ったんだ。

だって考の100倍おばさんは良い人だから！

その後私は言われるが儘考の家に行った。

「とりあえずこのタオルで拭いて？」

「あつ…ありがとうございます。」

大きなバスタオルを貸してもらって私は服を拭いたんだ。

「はい。これに着替えて？」

「えっ？でも悪いです。」

おばさんが持つて来てくれたのは私に不似合いなミニスカートとタートルネック。そしてジャケット。

「気にしないで？ウチは服屋だから在庫は沢山あるし。」

「でも／＼お金は払います！！！」

「いいわよ。あげるわその服。」

慌てて言っただけ。あげるって流されちゃった。

とりあえず風邪引く前に着替えたんだけど…私が着て良いのかって思う程かわいい。

「ハルカchanかわいい！！！待つて！靴下もどうぞ！」

「／＼／＼ありがとうございます…」

何か言われるが儘に着せ変え人形になってる様な気が…。

「母さん五月蠅い…って！！！！！！！」

「かわいいでしょ？」

突如現れた考は一瞬引いた。

引くよね 私がこんな格好しないもん。

スカートなんて制服以外履かないし。

「それでねそれでねこの帽子被って、ブーツはいたら完璧！」

「／＼／＼うん！！母さん、ハルカは着せ変え人形じゃないんだから。」

「／＼／＼／＼／」

ちよつと恥ずかしかった私は赤くなっちゃった。

「でもかわいいわよ？」

「母さん…」

「そつだ。考お茶出してあげなさい。」

「えっ！流石にそこ迄はお世話になれません！」

「お家には連絡いれておくからゆっくりしてっ！」
「はあ……」

考のお母さんはすごく嬉しそうに行っちゃった。
私は帰ろうとしたんだけど考迄…

「まあ服乾くまでいれば？」

「マジで……」

首根っこ掴まれて引きずってかれちゃった。

「とりあえず座れよ。」

「うん。」

何か考の部屋らしき処に連れてかれた私…
どうしよう。

ジタバタしてもしょうがないけどさ…

「はいココア。」

「ありがとう。」

「……………」

（何か会話…）

会話が無いよ。

ホントどうしよう！

てか何！？さつきから考！

私の顔じく見してるし。

「ハルカ…。」

「／／／何？」

「俺…」

ブーブーブー！！！！

「きゃあー！！」

突然何が起こったのかと思ったよ。
私の携帯が鳴ったんだ…

「メールだ！誰だろ？」

「ＴＯ芯

悠どこにいんだよ!?

みんな探してんぞ!？」

(芯だ…。みんな探してんの?)

何か私探されてたみたい…。どうしよう…

「誰から？」

「幼馴染み…。なんか探されてるみたい…。」

「大丈夫だろ。」

普通に言うなよ。

「私帰る!」

「こんなに大雨で傘も持って無いのに?」

「うつ…。」

「とりあえず返信しとけよ。」

「うん…。」

なんか考に言われたら引き下がっちゃうんだよね。

私って小心者…

「TO悠

今友達の家にいるから、大丈夫。雨が落ち着いたら帰るよ(<—>)

」

(送信つと)

芯に送信したのは良いけど何かやな予感がするんだよね！。

「ハルカ?」

「あつ…。何?さっき何か言おうとしてたけど。」

「ノノノあの 俺さ」

ブーブーブーブーブー

「また!?!しかも着信!?!はい」

『悠!今誰ん家いんだよ!?!』

「考ん家だよ!雨弱くなったら帰るって言ったじゃん!」

『迎えに行く!?!そこにいろよ!?!』

「ちよっ!芯!?!」

ブーブーブー。

やな予感的中…。

なんて騒がしい奴。

こつちが恥ずかしくなんじゃん。

「騒がしいなそいつ。外まで声漏れてるぞ?」

「ごめん。何か迎えに来るって…。」

笑いながら言う考は何か思ってたのかな?

まあべつに良いけど。

何か眠くなつて来ちゃった。

ココアから出る煙が揺れてる…。

うつ

「あれ?ハルカ?寝ちゃったのかよ。ったく…いつも肝心な処で…」

30分後

「悠!悠!起きろよ!」

何か私の名前呼ぶ人がいる

誰?

「ん?...芯!?ホントに来たの!?!?」

「当たり前だろ!?自分の彼女他の奴の所においとけるか!?!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「待つて待つて!芯それどういう事!?!」

「とにかく帰るぞ!!!!!!!!!!」

何かつてな事言ってるの!?!

おばさんに何も言えないで出て来ちゃったじゃない!

考も驚愕してたし…

「芯!!!!!!!!!!!!!!芯つてば!」

何も返事してくれないし。

何なの一体?

とりあえず芯の車に乗せられた私。

沈黙が痛い。。

「ちよつと芯?さっきの何?何時私があんたの彼女になった訳?」

「生まれた時からお前は俺の彼女だ。誰にも譲らねえ。」
「何言つてんだこの人？」

「はぁ？どうしちゃったの一体…」

信号は赤。

車は止まってしまった。

芯は私に近付いて来ると顎をくいっと持ち上げた。

「お前は俺のだ。あんな奴にやらねー！！こんなかわいい格好だつて誰にも見せたくなー。」

「芯…？」

すごく悔しそうな顔をして芯はハンドルを握りかえした。

（わけわかんない）

なんとなく昔から掴みにくい奴だったけどさ。

強引された時はちよつと嬉しかったかも…。《呆

（でもあんな奴って誰？）

翌日

「コーオー！！！」

「ん？ハルカ！おはよう！」

朝急いで学校来ちゃった。

だつて昨日。

2人に何があつたのか知りたいし…。

「ねえ。昨日私がねてる間芯と何かあつた？」

「なんで？」

「芯がめっちゃムキになってあんな奴にやらねーつて」

「ははは。あんな、俺が…俺が」

「？何？」

「…俺がお前に手出したと思ってムキになつたんだよ。」

「早トチりしたの！？信じらんない！！」

「まあまあ彼氏におこなや!」

「・・・考。良いの?」

「何がだ?」

「やっぱり良い。」

「ふーん。」

(あぶねー。好きって言っちゃうところだった。／／／／／)

考の奴。下向いちゃった。

何でだろう。

まあいつか。

早く教室行こうつと!

ガラ。

「ハルカ!!!ハルカ!!!聞いたよ!」

「何を!」

突然来たのはクラスメイトの香。

何か焦ったような動きをしながら私に衝突してきた。

「彼氏いたの!!!??」

「・・・は?」

「え?だって、昨日ハルカがらしくもないスカート履いて、男の人に手引かれて車乗ってたって!みんな見てるよ?しかも年上でしょ!」

香は私を揺すぶりながらずるーって連呼すんの。。

そんな良い奴じゃないよ?

勝手に彼女にされたし。

「あのね。カオル。」

「え???」

全部話しちゃった。

芯が幼なじみで横暴なこと。

何か芯がムキになってたことも。

「そっかあ・じゃあ考はシヨツクだつたらうね。」

「何で？」

「まさか。。。知らないの？」

「何？何かあったの？」

「考。ハルカのこと好きじゃん。」

「!!!!!!!!!!!!!!」

知らなかった、考が私のこと好きなんて。

何か気まずい・・・

やばい。何か芯がムキになったのも解ったかもしれない。

「まあいいじゃん？もうハル力には彼氏いるし。隣の高校の三

「年でしょ？羨ましー。」

「はあ。 。 。 。」

何も良くないよ？

知らない方が身のためだよ・

放課後

「ハルカー帰ろう！」

「うん!!」

今日も波瀾万丈な一日だった。

まあとりあえず、今日は帰ってゆっくりしよー。

・・・と思ったけど、そう簡単にいかないもんだね、人生。

「悠！」

出ました。お約束。

『明日学校に迎えに行くから』

本当に来てたなんて。。。。

「ハルカ！あれが彼氏！？」

「まあそんな感じ。」

「悠。今日は。あいついないよな。」

「いないよ。なにさせてんのさ。」

「とりあえず帰るぞ。」

「オイ、手はなせよ。」

「何で人の手握ってんだよ？」

「人目も気にしない奴だな。もうしんじらない。」

「見てみて、2年の久米さん。隣にいるの彼氏かな？」

「久米さんって美人だけど、良く男子とつるんでたよな？」

「可愛い。何かすっごい女の子に見える。」

「……………」

「考。。どうすんの？お前。」

「別に気にしてないし。」

「そのまま私は引つ張られちゃってるけど。」

「良いのかな？」

「だって、芯はクールで目茶苦茶モテるって有名なのに。」

「私みたいな凡人が横で手つないで歩いてて。」

「ねえ…芯。」

「何？」

「手…離して良い？」

「ダメ。」

「芯はそう言うとしっかりと私の手を握り返す。」

「何かめっちゃハズい。。」

「昔は良く手繋いでたけど、小4位になったら芯は繋いでくれなかつ

『ええ！？考に告白された！？』

夜相談で香に電話したら驚愕された。

「うん。私どうすれば良いの？」

『そんなの私に聞かないでよ。ハルカが好きな方選べば良いんだから。』

「そっか。そうだね。じゃあ考えてみるよ。」

『頑張つて！』

頑張ってみるものでもないけど。

ホントに私はどっちが好きなんだろ。

芯は横暴で我儘。考は優しくて友達みたいな奴。

「もうサッパリだよ。」

私はそのままベットで寝ちゃった。

朝、芯がインターフォンを押すまで。

「キヤー！！！！遅刻！！！」

バタバタと階段かけおりてすぐに玄関飛び出したら、爆笑してる芯がいたの。

「何焦つてんだよ…まだ7:45だ。」

「ノノノノみつ見間違えたんだよ。時計が壊れてたの。」

「うんうん。良い言い訳だ。」

「ノノノ違う！」

何か憎たらしいけど、この笑顔見ちゃうと、考より芯って思っちゃうんだよね。

「じゃあな悠。帰りも待つてる。」

「待たなくていい…」

chu。

「ノノノ芯！」

「ばいばい。」

不意打ち。

悔しい こっちは悩んでるのに。

普通にキスなんて。不覚だ。

ガラ

「ハールカ！見ちゃった♪校門の前でchうつて！」
「／／／／／／」

なんで見てんの？

だから恥ずかしいのに。

芯の馬鹿！

「ハクシヨン！／／／」

（誰か噂してんのか？）

「芯！1限目の体育外だつて！」

「ああ将、外つて言つたつて水道管工事で使えねえぞ？」

「隣の中学のグラウンド借りるんだと。遅刻したらグラウンド100周

♪」

「おいおい。それはまずいだろ。」

（まあ良いか、悠の学校だし。）

「なあ、隣の高校生が入つて来るぞ。」

「ええ？なんで？」

「あつ！見て見て！川崎芯君！かつこい！」
バンツ！

なんで？なんで来てんの？

何で高校生来てんのよ！

「はーるーか！」

「えゝ！！！！？」

手振るなよ！私の名前呼ばないでよ！
恥ずかしい／／／／

私は恥ずかしさを隠せないまま教室に入ってしまった。

「お前嫌われてんじやん？」

「さっきキスしたからかもな。」

「おいおい。」

「何？何？やっぱりハルカと川崎芯って付き合ってるの？」

野次馬、だから芯はやなんだよ。

私の机の周りには沢山の芯ファンがあふれ返っていた。

「ねえハルカどうなの!？」

（ああウザッたい！もう良いや！）

「付き合っ
て無い！！
芯は只の幼
馴染み！」

「なんだよ。じゃあ噂はデマだったのかよ。」

あーあ言っちゃった。

芯が聞いてたらなんて言うだろ。

... 20

後ろから腕をまわして、

「悠は俺の彼女だ。手出したら年下でも承知しないよ……」

ってそうこんな感じで…

(ええええ！！！！！！)

御本人ホントに登場しちゃった。

【キヤ……………！！！！！！！！】

2年のクラスからもの凄い叫び声が轟いた。

「芯！！！！授業は！！？／／／／」

慌てて平静を装ったけど、芯にはバレバレだった。

「chu。これから。じゃあな悠♪」

【キヤ……………!!!!!!!!】

まただ。

又不意打ち、すぐく女子は僻んでるし。

男子何かポーツとしてる。

「あれじゃあカップルじゃん。」

普通にケロツと言ったのは予想もつかない奴だった。

「考…」

「だよなあ、久米も認めるよ。」

凄くシヨック…

考まで言い出すとは思わなかった。

涙出て来ちゃった。

「そうだね…」

ガタンツ！

「お前らホームルーム始め…って久米！！！！」

思い余って飛び出しちゃった。

誰でも良いから助けて… 泣

ドカツ！

何かに衝突しちゃった。

「あつ…ごめんなさ…い」

??????????

目茶苦茶苦しいんですけど！

何か胸板に押しつけられてる！

誰！？

「悠。どうしたの？」

「芯…」

（涙取れてる…）

「何でもない。」

芯だった。

何でもないって言ったけど、何か涙出て来ちゃって止まらない…。

どうしよう…

「大丈夫？」

「ハルカ！！！！！！」

今度は考まで来ちゃった！！！！

このメンツはヤバいんじゃない！

「お前…考だっけ？悠に何かしたのか？」

「芯！？考は何もして無いよ？？？」

「川崎先輩…」

何か急に二人でガンの飛ばし合い。

（怖い）

「悠に手だすなよ。」

「川崎先輩。俺…先輩に先制布告します！！！！！」

（はあ？）

この流れは謎だよ！

一体何が起るっての？？

しかも廊下のだ真ん中で！

「ハル力が先輩を好きでも、俺に振り向いてもらえる様になって、ハル力を奪います。」

一体私は何なのよ！！！！！！

「ハル力…モテると大変だね。」

「香！！！」

もう目茶苦茶。

私の学校生活が今にも崩れそう。

（でも…ホントに私どっちが好きなんだろ？）

「考と芯か……はあ……」

あれ？何か目の前に手がある…もしかして…

「もちろん俺だよな？」

「キヤー！！芯！何勝手に入って来てんの！？」

「おばさんがあげてくれた…！」

（お母さん！！！！！！）

「？」

びっくりして目玉が飛び出しそうだったよ。

急に現れるんだもん。

「／／／／ちよつと」

「何？」

「手！離して！」

「嫌だ。ギューってしたいの。」

ギューっ
ておい
おい…

あんた学校とキャラにギャップあるよ。

（まあ良いけど／＼／＼眠い……）

ウトウトしてた所に芯が来ちゃったからもう眠さの限界……

「悠？寝ちやつたの？」

$$\begin{matrix} \neg \\ Z \\ Z \\ Z \\ \neg \end{matrix}$$

「あれれ」

(かーわいー
♪ ギューー)

朝起きたらね横に信じられない者があつたの。

「!!!!!!!!!!!!!!」

（えーっと昨日苺が来てる間に私が寝ちゃった…）

何かバタバタと動いて冷静になる。

混乱気味な私…

「悠。おはよ。c h u。」

$$\begin{array}{c} \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \\ \diagup \end{array}$$

はあ…

今日は土曜日普通に起きても早いよな。

お母さん達もピクニックだし……

ピーンポー

グツトタイミング！！！！！！

誰だろう。

「はい。」

ガチャ

「おっおう！」

気まずい奴＋１＝考。

「…はあ」

「何なに？来ちゃヤバかった？」

「やばいに決まってるんだろ？なあ悠？」

ああバツトタイミング…

私は何も答えたくないよ…

「じゃあ俺は借り物返しに来ただけだから。」

「借り物？」

「これ。親がお前の親につて。」

「あ…すみません。」

「じゃあな！」

何かセカセカと帰っちゃって大丈夫かな？

まあ私が気にする事でも無いか…

「なあ悠…」

「何？」

「俺の事好きか？」

「／／急に何言ってるの…あんたが私に好きって言ってるなら私が嫌いで言う筈無いじゃん。」

「マジ？うれしい！大好き！悠！」

ホントこのあまえんぼキャラはどこから出て来るの？

まあかわいいけど…

（つて私！染められ始めてる！！？）

「ハルカ！迎えに来たよ！」

今日は珍しく香が家にやって来た。

でもね昨日、芯の奴家に泊ってるの。

親普通にOKしちゃったしね。

「香…先行つてて。」

「えっ？折角迎えに来たのに？」

「うん…」

「あつ…悠いた。ギュー。」

「芯…!!」

又もやバツトタイミング！

香の顔が引きつってるじゃん…

「えつまさか芯さん泊ってたの!？」

「えーつと香chanだっけ？」

「はい…」

「香…!!変な誤解しないでね!？お母さんが泊めたんだから!」
全く朝から混乱招く様な場所にのこのこと出て来ないですよ！
もういや！

「じゃあ…後でね…ハルカ…」

「うん…」

パタン

「香chanで可愛くて良い子だね？」

ブチン

流石にキレルわ今のセリフ。

あんたは私が好きなんじゃないの!？

「じゃあ香といれば？」

「え？」

「そんなに香が可愛くて良い子って思うならこんな捻くれた私じゃなくて香にすれば良いじゃん!」

「悠。そんなつもりで俺は言っただんじやな…」

「帰って…!!もう来ないで!」

無理やり押し出しちゃった。

でも芯が悪いんだから、私悪くないよ。

一番振り回されてるの私何だから…

もう目茶苦茶だよ…

今日は朝から一人で登校。

あの時間に帰ったら私が出る時間に苾が来れる訳ないから…

「ハルカ！今日一人なのか？」

「考。うん。」

「なあなあ俺見込みある？苾さんとどっちがマシ？」

「二人とも微妙。」

「ガーン！…まっまあ元気出しな！明るく行こうぜ！」

バシッ

考が私の背中を後押しする様に叩いた。

いたかったけど少し救われた。

「……………考…！」

今日も長かったな

日直って言うのが最悪だったわ。

さっ、日誌だしてかえろ。そんな時、外からギター音岳聞こえて来た。

私は近所迷惑だなと思ったけど。

女な人の歌声が聞こえ始めたら何かジーンと来てしまった。

【もやもやの霧に埋もれても貴方はいてくれたのに

今じゃ手も伸ばしてくれない。

いつか、素敵な人が現れる…

貴方の言葉信じてた…

でも私にとって貴方しかいなかった…。

好き…

貴方へのこの気持ち。一生忘れない。】

あっ！

何か涙でてる。

つてもう半じゃん！早く出さないと。

慌てちゃった。

心の中で、あの人と話がしたいと思ってるし…

「久米く遅いぞ」

「すつすみません！」

「まあ気にするな。何かお前もいろいろ大変そうだしな。気をつけて帰れよ」

「はい…さようなら。」

先生の耳まで噂が回ってる…

まあ噂にもなるよな…

廊下の真ん中で先制布告しちゃったんだし。

「はあ…」

「悠！」

出ました見たくない方。

スルーすれば良いよね？

しちやえ。

でも上手く行かないな。

腕掴まれた。

「逃げんなよ！悠！」

「離して！香の所に行きなさいよ！」

「俺は…俺は！お前じゃないと意味が無いんだよ！お前だけが好きなんだよ！悠！」

「何適当行つてんの？香の方がかわいいんでしょ！？かわいい方にいきなりよ！！！」

すつごい恥ずかしい…

道の真ん中しかも学校の前でこんな大声出して喧嘩って…

「まあまあそこのお二人さん。落ち着きなさい。」

割り込んで来たのは女の人何か肩を叩いて止めてくれた。

何か解らないけど芯がその人に事情を話しちゃった。

「ちよつと！」

「悠chanだっけ？落ち着いて。私はあなたが凄い羨しいな。2人の男の子に取り合いされるなんて」

「でも！二人共いい加減で…何考えてるか解んなくて…」

芯の前だけど本音言っちゃって良いよね。

だって全部知られちゃってるし。

「わかるよその気持ち。男の子って女の子からかつの好きなのよね？芯君？」

「／／／／はい…」

「でもね。からかわれるとね、自分の事を好いてくれるか解るんじゃない？今はどっちがその傾向が強いのか？」

「／／／／芯…」

「じゃあ考君よりも芯君の方が悠chanの事目茶苦茶好きなんだよ！」

凄いこの人自信満々。

何か憬れちゃう？

でも確かに、香の事言われたとき私の気持ちは芯の方に向いてたんだと思う。

「悠chan…芯君はからかっただけなの。許してあげて？」

「……………ごめんな悠…」

「……………しょうがないか…許してあげるよ！」

「良かったわね芯君！！！」

みんなの朗らかな笑顔に見入ってしまう…。

「…はい！！！」

「よし！私はもう一演奏しようかな！」

「演奏…？」

女の人はおもむろにギターを取り出すと引き始めた

【あの頃の私 苦しみ影に笑っていた

何も言えずに一人暗闇の中堪えていた。

縋る人が見つからなくて 小さくなっていた。

無理するなら僕に話してくれ無いか？

貴方の手に引き込まれ私は泣いた。

何故 どうして 貴方は私に手を差し延べるの…
笑ってくれたの…？

それが永遠に続くと思った。

なのに…なのに…

もやもやの霧に埋もれても貴方はいてくれたのに

今じゃ手も伸ばしてくれない。

いつか、素敵な人が現れる…

貴方の言葉信じてた…

でも私にとって貴方しかいなかった…。

好き…

夢の中の出来事かもしれないけど貴方へのこの気持ち。私は一生忘れない。】

この歌…この人のだったんだ。

何でだろう。

何でこんな気持ちが揺れるんだろう。

「悠…？」

「ねえ… どうしてこんなにストレートに相手を想えるんだろう。」

「それは… 自分が好きになった人だから？ 気持ちは遠回りしても近付きはしない。

ハッキリした気持ちが人を想ってるんじゃないか？」

「んゝ何か芯がいうとわからないけど気持ちはぶつけないと行けないのか。」

なんだそれと芯がブスツと言ったけど。

何となく芯をみてたらわかったよ。

芯は私に全力でぶつかってんだって。

「芯…」

「何？悠」

「私さ、年上でいっつも私の側にいて人目も気にしないで、キスしてくるような奴だけどき。やっぱり考よりずっと一緒にいたいと思う。」

「え…？」

「だって、一番に私の事想ってくれてるのその人しかないじゃん。確かに二人に告られて困ったけど…やっぱり…芯が好き。………大好き！」

芯は疑う顔だったけど素直な私の気持ち解ってくれたみたい。ギューってしてきた。

「じゃあ…これからは普通に大好きとか言って良いんだよね…？俺等両想いになれたんだよね？」

「うん…そうだよ。おまたせ…芯。」

「……………ギュー。。。」

芯はギューって言いながら照れ隠しをしてた。

かわいい所あるんだ高3の癖に…。

そしていつの間にか女の人はいなくなってしまう。日も暮れて来た。

「どうしても！ダメなのかよ！！ハルカ！」

「ごめん…考」

「……………」

「ごめん…」

「良いよ！気にすんなって！芯さんと仲良くな！」

「ありがとう…」

考には次の日全部語った。

考は無理に笑った感じで気にするなと言ってくれた。

私はすぐにその場を離れて教室に行った。

「考…」

「香…俺、フられちゃった！はは。やっぱり俺が入る隙間なんてなかった…」

「考…泣きたい時は泣くものよ?」

「馬鹿野郎…うつ…」

「よしよしあんたは昔から変わらないわね。自分らしく生ければいいのに…。」

「悠! 遅い! 映画始まる!」

「ごめん!!! 掃除当番だった!」

「サボっちゃえよ」

「ダメ!」

「わあ! 後五分!」

「急げ!!!」

芯が私の手を取ると慌てて映画館に走っちゃった。
この手、はなさないでね

大好きだよ…芯!

chu!

何かほおに触った。

何?

これって… // // //

「しーん!!!!」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8392b/>

トライアングルの音色

2010年10月15日05時15分発行